

ICOM 保存委員会第6回大会（オタワ）に参加して

三 浦 定 俊

昨年（1981年）9月21日から25日まで、カナダの首都オタワにおいて、ICOM（国際博物館会議）保存委員会の第6回大会が開催された。筆者はそこに奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏と共に参加したが、ここではその会議の様態を簡単に述べる。

大会参加者は、配布された名簿では37ヶ国、約470名であるが、実際には名簿に登録されていない参加者も多く、500名以上にのぼったと思われる。会議場は、国立美術館のななめ前にあるコンファレンス・センターであった。オタワは小さな街であるので、会議開催中はどこへいっても、ICOMのバッジをつけた参加者に顔が合った。

会議は20日の日曜日から参加者の登録が始められ、翌21日の10時から開会総会が行なわれた。その午後から分科会にわかれて研究発表が始ったが、分科会の数が全部で22もあるので、1日4つくらいずつ、コンファレンス・センターの別々の会議室を使って発表が行われた。朝8時半から午後1時半まで途中1時間のコーヒープレイクをはさんで研究発表と討論を行い、午後は見学など夕方はパーティと、朝早くから夜遅くまでぎっしりの日程で、オタワの街の中を見て歩く暇はほとんどないほどであった。

分科会の名称は下の通りである。

1. 新しい試験方法の応用



図-1 大会総会会場
Fig. 1 Main hall of the meeting

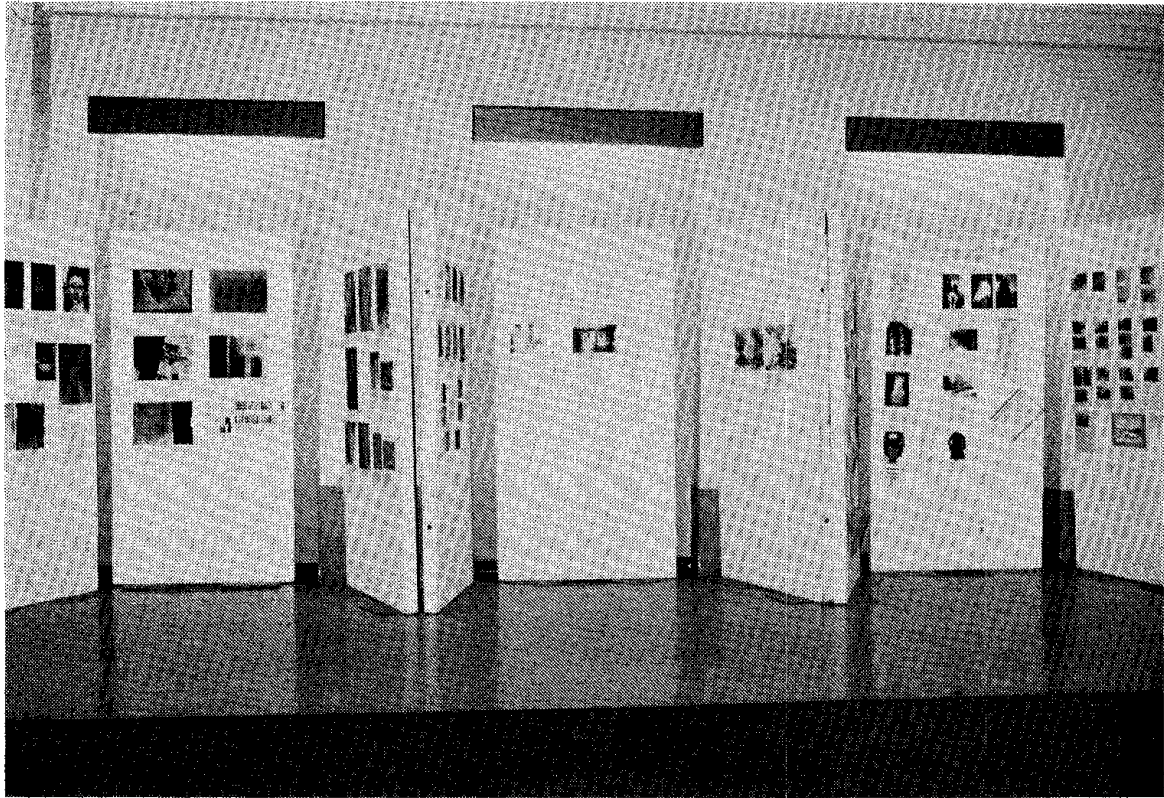


図-2 展示による研究発表
Fig. 2 Poster sessions

2. キャンバスに描かれた絵画の構造修復
3. 民族学的資料
4. 文書記録
5. 彩色彫刻
6. 20世紀絵画
7. 出土木材
8. 参考資料
9. 織物
10. 石
11. 修復の理論と歴史
12. 美術品の輸送
13. コンサベータの訓練
14. 図版および写真資料
15. 壁画とモザイク
16. 保護のための伝統的および近代的コーティング
17. イコン
18. 照明と空調
19. 皮革製品の保存
20. イーゼル絵画
21. 石英質の考古資料
22. 金属

参加者数は分科会によってかなりばらつきがあり、金属の分科会では200人くらいになった

と思われるが、なかには大会初日まで報告が一篇もない分科会もあった。

筆者の参加した分科会は、第1分科会(新しい試験方法の応用)と、第18分科会(照明と空調)でそれぞれ発表を行った。第1分科会で報告された論文は次のようなものである。

- ① 工芸品のX線立体写真による調査(ミュゼウ他[モスクワ結核研究所, ソビエト])
- ② 高解像度フィルムを用いた絵画の密着写真撮影(プレスコット[国立海事博物館, イギリス])
- ③ 絵画の赤外線写真(コゾラポフ[エルミタージュ博物館, ソビエト])
- ④ クラスタ分析とその応用(チェジカ他[国立博物館, チェコ])
- ⑤ 絵具顔料の定量X線マイクロ分析のための非破壊サンプリング方法(メリンジャー他[色彩科学研究所, オーストリア])
- ⑥ 絵画断片の油鑑別のためのトポ化学反応(マッティニ他[フィレンツェ修復研究所, イタリア])
- ⑦ 17世紀後半のろうそくのX線分析(アルツコーバ他[ソビエト])
- ⑧ フレスコ石こうの接着状態の間接測定(マンガネリ・デル・ファ他[フィレンツェ保存科学研究所, イタリア])
- ⑨ 古いゼラチンの赤外分光分析(バースタイン他[ソビエト])
- ⑩ 原始フラマン絵画技法調査のための科学的試験方法(ペリエ・ディテレン[ブリュッセル自由大学, ベルギー])
- ⑪ 11世紀から13世紀にかけての肖像画(フレスコ)の調査(ジルゲンドルフ[ジョージア州美術館, ソビエト])
- ⑫ 写真測量および写真撮影によるラスコー洞窟壁画の複製(ラーニエ[ルーブル科学研究所, フランス])
- ⑬ コンピュータX線断層撮影による仏像の調査(三浦[東京国立文化財研究所, 日本])

以上のように報告のテーマは多岐にわたっていて、詳しい説明になると参加者同士の専門が違いすぎて互いの理解が難しかったせいか、質問も、その試験方法の利点と欠点、応用の限界といった具体的な内容が中心であった。その意味では、ボストン美術館の学芸員から、具体的資料を示しての、大きな絵の原寸大写真撮影方法の説明(プログラムにはあげられていない)は出席者の関心をよんだ。この他同じくプログラム外でアメリカのメイヤー氏が発表した絵画のオート・ラジオグラフィも注目すべき手法であった。これは、絵を原子炉に入れて放射化し、ある時間冷却した後、絵とX線フィルムを密着させて、放射化された顔料の像を撮影する方法である。放射化分析と同じように、冷却しながら、ある決まった時間ごとに撮影していけば、色々な顔料の像を得ることができて、それらの顔料がどのように使われているかという分布が一目瞭然である。

第18分科会では次のような報告がなされた。

- ① ISO(国際標準機構)に定められた退色標準試料を用いた博物館照明の研究(フェラー他[メロン研究所, アメリカ])
- ② 博物館の展示における最適な照明条件設定の原則(ジュロウ他[ソビエト])
- ③ 一時的な展示について(ナルディ[イタリア])
- ④ 展示ケース内の湿度変動——その1, 調湿剤の能力(ワイントラウブ[メトロポリタン美術館, アメリカ])

- ⑤ 展示ケース内の湿度変動——その2, 調湿剤の静的, 動的特性 (三浦 [東京国立文化財研究所, 日本])
- ⑥ 展示ケース内湿度変化の安定化, シリカゲルとケース設計の果す役割 (ラーマー [イースト・アングリア大学, イギリス])
- ⑦ 何故, 学芸員はシリカゲルを使わないか, シリカゲルの3つの役割 (ド・ギシェン [国際保存修復センター, イタリア])
- ⑧ 美術品のための空調されたケース, 設備と監視 (ストロー [カナダ])
- ⑨ 博物館内の結露と降水 (パットフィールド他 [保存科学研究所, アメリカ])
- ⑩ 壁画の微気象 (カディスキー [ブルガリア])
- ⑪ 空調による博物館内の温湿度調整 (ボイコ他 [ソビエト])

博物館内照明に関して議論をよんだのは, プログラム外でベルギー王立文化財研究所のド・ヴィット氏から, 1980年10月にできたベルギー国内の博物館の照明基準は, 50ルクスというきわめて低い照度におさえられているという発表があった時であった。氏の説明によれば, 50ルクスというのは低すぎるように思えても, 一般に作品は長期間展示されていること (外国では原則として常設展示で入替なし), 照明による退色は (照度) × (時間) で効いてくることから, 決して無謀な値ではないということであった。

先年, アメリカと日本との間で美術品の相互貸出しの際の展示環境基準の取り決めが行なわれたが, そこでは染織品や版画など光の影響を受けやすいものについては, 年にのべ5000フットキャンドル時間 (約54,000ルクス時間) 以下になるように照度と展示期間を定めるとしてある¹⁾。この値は, 例えば展示の照度を50ルクスにしても1080時間, 1日10時間展示するとして108日 (3ヶ月半) の展示期間に相当する。長年, 展示されたままの美術品はいかに大きな, 光による被害を受けているか推量できる。ベルギーで定められた博物館内照度基準に一理あることがわかる。なお, のべ照度時間と退色との関係については, 第18分科会でのフェラー氏の論文に詳しく述べられている。

次に湿度調節については, シリカゲルの利用が一般的になってきつつあるが, まだその働きが十分に理解されず, ケース内に申し訳程度に少量入れただけとか, 入れっぱなしでケース内湿度をモニターしていないとか, まだまだ基本的な知識が一般に行きわたっていないことがド・ギシェン氏他色々な人々から指摘された。

博物館内の湿度調節を空調機によるか, シリカゲルのような調湿剤を入れたケースによるかは, その場合に応じて判断しなければならないが, いずれにしても設計にあたっての十分な配慮と後からの環境温湿度のモニタリングが大切なことを, ラーマー氏とパットフィールド氏はそれぞれ報告の中で述べている。簡単なようであり, なかなかできないことである。

シリカゲルそのもののケース内で果す役割りについては, ストロー氏が欠席したため, ワイントラウブ氏と筆者の2報告だけとなった。新しいシリカゲルの性質とシリカゲルシートの使用は出席者の大きな反響をよんだ。詳しい内容は, 本号中に別に報告している²⁾。

この他, 美術品の輸送に関する分科会や, 沢田氏の発表があった³⁾⁴⁾ 出土木材の分科会と石英質の考古資料の分科会などに出席したが, いずれも出席者の熱心な質問と討議で活気あふれるものであった。

はじめて出席してみた ICOM 保存委員会大会では, 以前に来日したことのある人々や, 1978年から79年にかけての滞欧の折に知りあった人々などに再会できたし, 論文でしか知らなかった人々とも懇意になれて, 大変有意義にすごせたと思う。数多い参加者が, パーティやコーヒ

ーブレイクの時間に、自由に相手をつかまえて討論し、研究情報を交換し合っている姿は、外国での学会に出席できる機会が限られている我々日本の研究者にとっては、うらやましくもあり励みにもなった。今回新たに知り合えた人々を含めて、また次回に、それぞれの研究成果を発表し合い討議できたらと思うし、将来このような大きな大会を日本で開催できたらどんなに良いだろうかと多くの参加者と話し合ったことだった。

参 考 文 献

- 1) Report of the study group on care of works of art in traveling exhibitions of the museum exchange, Japan Society (1980)
- 2) 三浦定俊：環境システムとしての展示ケース，保存科学，21 (1982)，pp. 55—59
- 3) M. Sawada：A modified technique for treatment of waterlogged wood employing the freeze-drying method, ICOM Committee for Conservation 6th Triennial Meeting (Ottawa), (1981)
- 4) M. Sawada：A new technique for the removal of stratigraphic sections in archaeology, *ibid.*

About the 6th Triennial Meeting of ICOM Committee for Conservation

Sadatoshi MIURA

The meeting was held at Ottawa from September 21 to 25, 1981. There were 22 working groups. The author participated two working groups: the new application of examination method, and the light and climate control. The titles of reports in the sessions and their brief explanations are given.